

テレビ「世界の地理」を利用して

村田波夫

(野辺地高校)

1. はじめに

近年の科学技術の急速な進展は、教授内容を質的に高めると共に、量的にも激増させている。従つて教育の近代化・能率化という観点から、教育現場にも新しい教育機器がどんどん導入されてきている。一方、情報化社会が喧伝される今日、映像教育の重要性が指摘されてきた。このような動きを反映してか、ここ二・三年のVTRの普及にはめざましいものがある。例えば広島県の公立高校の場合、昭和41年当時VTRは数える程しかなかったものが、44年は69校中60校(80台)が保有するまでになつている。

実はこのような動きは筆者自身も定性的ではあるがキャッチすることができた。つまり、たまたま昭和41年と44年の放送教育全国大会に出席する機会を持つたが、前者の場合はVTRが開発されたばかりの時点でもあり、出席された先生方もあまりテレビ利用の授業の実績がないようで、公開授業もテープレコーダーが主体であつた。それが昨年の仙台大会になると、VTR普及の反映から出席者も格段に多く、又分科会の内容もテレビ番組の授業への効果的導入をめぐつて質の高い議論が活発になされ以前とは隔世の感をうけさせられた。

このような動向の中で本県の現状を顧みると、あまりにもその遅れが痛感されるのである。つまり昭和43年での公私立高校合わせての普及は、僅か5校(6台)(注2)にすぎずこのことは放送教育の認識欠如というよりは、むしろ経済的側面が影響していると思われるので、県教育行政当局の強力な財政面でのてこ入れを切にお願いしたいものである。

このようなVTRの急激な普及に伴い、テレビ教材の特性の分析や、テレビ利用の効果的授業への位置づけ等が、盛んに各現場で研究されている。ここでは乏しい実践を通して私が感じた事、問題点等を若干述べてみたい。

2. 視聴までの経過

本校へVTRが導入されたのは昭和42年3月で、それまではTV台数が一台しかない為TV教材の授業への導入など思いもよらなかつた。さてVTRが導入されたものの機械操作の煩しさと、視聴覚教室の不備、テーブル本数の絶対量の不足等相まつて一部の先生しか利用しない状況だつた。私もTV教材の効果的利用法の困難さや録画の煩わしさもあり二の足を踏んでいたが、既存の教材書中心の平板的羅列的授業への疑問もあり、43年4月より授業へ選択視聴という形で組み入れてみた。その後思考錯誤をくり返し今日に到つているが、漸くある程度番組内容・生徒の反応等が把握できるようになつてきた。そうは言うものの授業への位置づけや生

徒の理解度の測定等全く研究不十分で、改めてその利用の難しさを痛感している今日この頃です。

3. 教科としての視聴理由

社会科のねらいは現実社会の基本的構造を理解させるための認識力を生徒に育成していくことにある。従つて授業では社会科の見方・考え方の育成（社会事象に問題意識を持たせ、又それらを総合的に理解させる）に重点がおかれねばならない。換言するならば指導過程にあつては思考を帰納的に展開させていくことが大事である。ところが従来の教師主体の教科書中心の授業ではややもすれば知識の注入に陥りがちで、生徒にも社会科は暗記教科であるといった誤った観念を植えつけがちであつた。TV教材の提供する身近な具体的な事例が授業に効果的に生かされるならば、社会科教育のねらいに迫る何かが出てくるような気がするのである。ましてや地理の場合は、その科目の特性として世界の諸地域の生活様相や社会の動向を、その地域地域の環境に即してダイナミックに把握させる必要がある。これにはもはや教科書と教師の理解では追いつかず、ここに追力ある画面で最新の資料や動向を提供してくれるテレビ教材を授業に導入する意義があると考えるのである。

4. VTR利用上の問題点

まず設備の不十分さから生ずるものとして

- イ 視聴覚室がないため、VTRやTVの移動が大変である。
- ロ 暗幕・カーテン等がない教室の場合、光線の反射により画面がよく見えない。又白黒の微妙なコントラストもよく見えない。
- ハ 19インチテレビでは画面が小さすぎる。
- ニ 地理で使えるテープが現在7本しかない。従つて良い番組でも消さざるを得ない場合もあるし、逆に全番組を録画できない場合もある。特に年間計画への位置づけを考慮すれば、どうしても良い番組は全部残したい。
- ホ VTR・TV共一台づつしかないので、希望時間に利用できるとはかぎらず、又録画ともかち合うこともある。

以上の事に対し、一応次のように対処している。

イに対しては一年生各クラスにテレビ係を設け、運搬を専門にやつて貰うと同時に、VTR再生の操作訓練をしておく。

ロとハはテレビを2台設置できない現状なので、光線の比較的入らない位置にテレビを設置し、生徒の座席もそれに応じて適宜移動させる。又細かい数値・表・グラフ等は予め模造紙で準備したり、オーバーヘッドプロジェクターで写せるよう準備する。

ニとホは経済的問題がからむので大変であるが、テープの場合は内容的に大した価値がないも

のはどんどん消して行くしか手がない。又貸出や録画時間の調整は視聴覚委員会が、時間割とにらみ合わせて計画している。

次の問題点はTV教材の位置づけとも関連するのであるが、TV内容を如何にして生徒に把握させるかである。なにしろ対象は高校一年生である。彼らは中学校時代殆んど視聴経験を持たず、中には勉強に意欲がない者もたくさんいる。テレビと言えば特別サービスと考え授業とは考えない者や又テレビで対談が始まればあきってしまうものが大半である。さらにテレビ内容は20分という時間の制約もあり、かなり精選濃縮されているのでテンポが早い。従つて見のがし・聞きのがしがでたり、又ノートもとれないという問題がある。

以上を解決するにいろいろな方法があると思われるが、何といても教科書の単元との関連をはつきり押さえる必要がある。同時に番組の流れや重点事項を予め指示してメモをとらせるとか、又予めテレビ内容に関連した課題を与えておくことも効果的なようである。又視聴後のテレビ内容の基本的事項の確認と問題点を投げかける番組の場合の話し合いは、特に大事であろう。そして最終的には、視聴経験を通して生徒がテレビ内容の中から重点事項を自らの手で選り分けができるようにする必要がある。そのためには、TV教材の授業への導入にあつては、まだまだ考慮しなければならない点が多々ある。

5. TV番組「世界の地理」の性格

番組の内容、展開は教科書に即しているわけではない。番組はそれなりのまとまりを持ち、そこには番組製作者のテーマに対する地理的視点・意図が窺われる。従つてテレビ内容だけでは完成した授業にはならず、事前指導や事後指導が是非必要である。そこで授業へ導入するにあつては、教科書単元への位置づけが極めて大事である。そのためには番組内容の分析が必要なのだが、NHKで発行しているテキストの内容は簡単すぎ、しかも実際の画面の内容画面とく違ひ場合もあり、非常に位置づけを困難にしている。もつともVTRを利用すればこの点は問題なくなるのだが、前述の如くテープの少ない現状ではテキスト内容を見て選択録画をせざるを得ず、せめてテキストに製作者の意図でもあつたらと痛感している。とは言ふものの「世界の地理」は内容的にも生徒へ訴えるという面でも実に優れた教材だと思う。各地域の最新の動向や生活様相がフィルムドキュメンタリーを通じて迫ってくるので、生徒は現実感を持つて受けとめる事ができ、強い印象が刻まれるようである。例えばカナートよか匠延工場の内部とかは、教師や教科書を通じては決して具体的なイメージは与えられないと思うが、番組視聴後は一年経過した今日でもそれをリアルに表現できる位強い印象を残している。特に問題点を投げかける内容の番組の場合は、まさに思考体系の育成という面からも好適で、生徒も自己の身近な問題として番組に引きこまれるようで、まとめでの話し合いは平常の授業では味わえない程活発化する。さらにこの番組には、教師のまだ未知の内容や又教師とは異なる視点等が窺われ、そ

ういう意味では教師にとつても実に勉強になり有用であると思う。ただ番組どうしを比較した場合、内容的にも構成的にも優劣差がかなり見られる。中には資料不足のせい、スチール写真と対談で時間の大半が費され、TVの特性である迫力ある画面が生かされておらず、内容的にも貧弱で全く授業へ組み入れる必要を感じないようなものもある。そういうわけで私の場合は時間数不足やテープ不足と相まつて選択視聴の立場を取っている。又対談形式の番組の場合は、それなりの意義は認めるが、ややもすれば結論的なものを一方的に生徒に与える懸念がある。又前述のTVの特性とか生徒の発達段階等を考慮した場合、極力少なくした方がよいと思うが如何だろうか。この事は44年度に授業で利用した番組に対する生徒の反応にも如実に反映しているようで、アンケートによる生徒の印象に残る番組を順番にあげると次のようになる。1位鉄鋼業(43年度のもの)、2位日本の林業(43年度のもの)、3位ソ連の農業(43年度のもの)、4位電力(43年度のもの)、5位石炭産業の将来(44年度)、6位乾燥気候・イラン(43年度)、7位地中海式農業(44年度)。これを見ると人気の高い(印象に残る)と指摘された上位番組は、いずれもフィルムドキュメンタリー形式で生々しい現実社会の生査状況・動向・問題点を提供している番組である。逆に印象度の低いものはスチール写真や対談が主体の番組で、乾燥気候も地中海式農業も早い時期に見せたという事もあるが、それ以上に番組の構成が影響しているものと考えられる。特に地中海式農業にいたっては、題名を示しアンケートをとつた所、私のクラスでは見せていないと回答が多数あつたのには全く驚かされた。45年度の番組は世界地誌を主体に編集されるようであるが、是非フィルムドキュメントで問題点を投げかけるような形にまとめてほしいものである。さらに平凡ではあるが、バックミュージックの良否が生徒の画面への集中に関係するのでこの点も考慮してほしい気がする。

6. おわりに

優れた教材である「世界の地理」が効果的に生かされるには、その位置づけや利用法の徹底した研究が必要なのは当然であるが、卒直に言つて今日まではTV教材がVTRを通じて使えるようになったから使つてみたに過ぎないものであつた。年間計画のどこへの番組を組み入れるか、単元のどこで使うか(私の場合は問題提示しているものはまとめて使い、その他は番組の性格によつて思考錯誤的に導入し、まとめて使っている)、1時間の授業のどの時間で使うのが効果的か、解説が多すぎる場合又その逆の場合如何にするか等今後の大きな課題である。又番組の生徒への効果の測定も現実に行われているベーパーテスト(思考力の育成をねらうというよりはむしろ知識の集積をねらう)では困難で、この面も研究の対象となる。このように今だに暗中模索の段階にあり、しかもTV教材の利用は必然的に進度の遅れを帰しているが、やはり地理教育の本質を考えた場合、TV教育で育つた生徒はきつと何かをつかんでいるはず

でそれは長い目で見た時出て来るような気がするのである。そういうわけで今後も大いに授業で利用しかつ研究していきたいと考えている今日この頃です。

次の方々のものを参考にしました。

溝西護 「視聴反応を通して得られるテレビ教材の利用法」

青森県教育委員会 「視聴覚機材設備状況調査 昭和43年度」

菅野俊篤 「世界の地理」を視聴して

佐藤有彦 「NHKTV。世界の地理」を利用して

宮城県高校視聴覚教育研究会 「世界の地理」ビデオテープ目録